

令和元年度
中部地区
COC事業採択校学生交流会
・称号サミット

CONTENTS

目次

はじめに&テーマ	1
ポスター紹介	
香川大学	2
金沢工業大学	3
岐阜大学	4
皇學館大学	5
信州大学	6
中部大学	7
富山県立大学	8
富山大学	9
名古屋学院大学	10
日本福祉大学	11
福井大学	12
平成30年度中部地区COC事業採択校学生交流会の様子	13
平成30年度はばたけ地域創生士!サミットの概要	16

令和元年度

中部地区

COC事業採択校学生交流会
・称号サミット

はじめに

今年度で6回目となる中部地区COC事業採択校学生交流会(幹事校:岐阜大学、金沢工業大学)は、主に中部地区のCOC事業またはCOC+事業採択校の学生たちが一堂に会し、これまでの地域活動やその成果を発表し、学生・大学関係者、地域住民及び企業関係者などにご覧いただくことで、各大学の取組みや活動について理解を深めていただくとともに大学間や地域での連携の強化を図ること、また、学生が他大学の学生と地域活動に関して情報交換し、交流を深めるとともに、地域活動の発展ならびに自身のキャリアアップを図ることを目的として開催してきました。

また、今回は、昨年度より開催する福井大学と岐阜大学を幹事校とした称号サミットも合同で企画し、全国のCOC事業またはCOC+事業において教育プログラムを実施している大学・学校の学生が自らの活動の成果を発表する機会としました。

このように、今年度は、全国のCOC事業及びCOC+事業の関係大学・学校の代表学生らが、正課授業や課外活動、教育プログラム等における地域での活動やその成果を発表し合い、これまで以上に大学間や地域での連携・交流を図ることを目的とした中部地区COC事業採択校学生交流会と称号サミットの合同開催を計画いたしました。

しかしながら、折からの新型コロナウイルスの流行に伴う感染拡大防止のため、幹事校としても開催を願っておりましたが、参加学生及び教職員の皆様、来場者の皆様、また保護者の方々にとって安全・安心な環境が最優先であることから、開催の中止を判断しました。

ただ、参加大学の皆様が発表のご準備を進めていただいたことから、1年間の学生の活動成果を広く地域・社会に周知・還元することを目的に、参加大学の皆様の多大なご理解とご協力のもと、同冊子を編集、発行することができました。この場をお借りし、心より御礼申し上げます。学生たちの活動の成果が多くの方々に届くことを期待しております。

テーマ

大学名	テーマ
香川大学	瀬戸内地域活性化プロジェクト(東かがわ市)
金沢工業大学	データサイエンスで地域課題解決～KIT AIデザインプロジェクトの取組成果報告～
岐阜大学	産業リーダー実践の活動報告～外国人を呼び込む日本のTEMPURA～
皇學館大学	「広報いせ」特集記事制作プロジェクト
信州大学	初開催!!「大しごとーくin信州2018」
中部大学	中部大学ESDエコマネージャーチーム～学生主体の標準化教育～
富山県立大学	地域協働研究会COCOS
富山大学	未来の地域リーダー ～自立化に向けて～
名古屋学院大学	ミツバチがつなぐ人と人～養蜂を通じた地域活性化プロジェクト～
日本福祉大学	東海市 カルタ制作 学びの芽 ～シビックプライドの醸成にむけて～
福井大学	福井大学初「産学連携の日本酒」と「酒粕」のプロジェクト

香川大学

瀬戸内地域活性化プロジェクト(東かがわ市)

学生： 経済学部2年 市原李華、田岡大周／経済学部1年 中奥あみ／農学部1年 竹島ありさ、松岡佑奈
担当教員： 経済学部教授 原直行／地域連携・生涯学習センター特命講師 長尾敦史

概要

学生が地域での実体験に基づいて学ぶプロジェクト型授業である。現在人口減少と高齢化が急速に進展している東かがわ市を対象に、学生が地域コミュニティへ参加し、定住促進策を提案している。現在、東かがわ市内8つの地区で活動を行っている。

教育的な効果・目的

「地域に貢献できる人材」の育成

身ら地域づくりに参画・協働して作っていくものであることを理解し、実践できる。

「課題の探求・解決力のある人材」の育成

地域の実態を自らの眼で確かめ、課題を発見・探求し、その課題の解決策を実践的に考え、現場の異なる立場の人々と協働で課題解決に取り組むことができる。

「社会での対応力のある人材」の育成

地域の方々と接し、チームの中での身らの役割を自覚して行動することで、協調性など社会での対応力を身につける。

東かがわ市とは？



- ・人口**28,712人**(2020年)
- ・65歳以上の割合は**39.5%**(2015年)
- ・特産品：手袋(国内シェア90%)、ハマチ(ハマチ養殖発祥の地)、和三盆(江戸時代からの高級砂糖)など

内容

取り組み手法



①地域のひとと企画

- ex)・5W1Hは？
- ・理念に沿ってるか？
- ・ゴール・プロセスは？



②準備

- Ex)・試作・役割分担
- ・チラシ、pop作り
- ・当日の条件確認



③実践

- Ex)・買い出し
- ・地域の人の手伝い
- ・イベント参加して



④振り返り

- Ex)・振り返りミーティング
- ・snsでアウトプット
- ・Drive等にデータを残す

概要詳細

〈プロジェクトメンバー構成〉 (学部分布)

1年生**20名**、2年生**11名**、
3年生**14名**、4年生**4名** 計**49名**
経済学部**28名**、
創造工学部**7名**、農学部**7名**、
教育学部**4名**、法学部**3名**

一年の主なスケジュール

通年	春	夏	冬
<ul style="list-style-type: none">◎各地区で月一回協議会・廃校利用 ・イベント企画・南海トラフ大地震対策・新施設計画・地方公債の使い道・新年会 ・忘年会	<ul style="list-style-type: none">◎新体制が始まり、チームづくり・新歓合宿・ミーティング・イベント参加	<ul style="list-style-type: none">◎ジオサイト、祭りなど毎週イベントが開催される・イベント参加・ツアー企画・寺子屋事業・ドローン練習	<ul style="list-style-type: none">◎活動の集大成・イベント参加・シンポジウムで発表・報告書作成・瀬戸P全班で交流会・フリーペーパー案件

〈事例紹介〉



取り組みで得た学び

地域活性化活動を行う上で必要な「地域のひととの信頼関係を築くことの重要性」に対する認識はチーム内でも高まっており、自分たちの専門的能力を応用しようとする動きが見え始めてきた。ただし規模や課題が地区によってバラバラな中で「**地区別リーダー制**」をとっていることや、**個人で動いていた結果**、チーム内に到達度の差が生まれていることもまた事実であり、今後は仲間とともに課題をクリアしていくチーム学習へと意識を変革させていく必要がある。

金沢工業大学

データサイエンスで地域課題解決

～KIT AIデザインプロジェクトの取組成果報告～

■AIデザインプロジェクトとは



データやAI・データマイニングといった技術を用いて、学生による実践的な地域の課題解決に取り組む課外プロジェクト活動。プロジェクト期間は約2カ月。

✓工学部

機械工学科2年 1名
航空システム工学科2年 1名
情報工学科1年 2名

✓情報フロンティア学部

メディア情報学科2年 3名
心理科学課2年 1名

■プロジェクトを構成する要素と今回のプロジェクトテーマ



✓ステップ①：テーマ（顧客）深掘

金沢マラソン事務局を、AIデザインプロジェクトチームにとっての顧客と位置づけ、顧客が求めている価値を創造する

✓ステップ②：ツール（AI等）修得

全学的に導入されているIBM Watsonの使い方を修得する。AIのモデル生成を行うツールや、テキストマイニングのツール等

✓ステップ③：分析・AIモデル生成

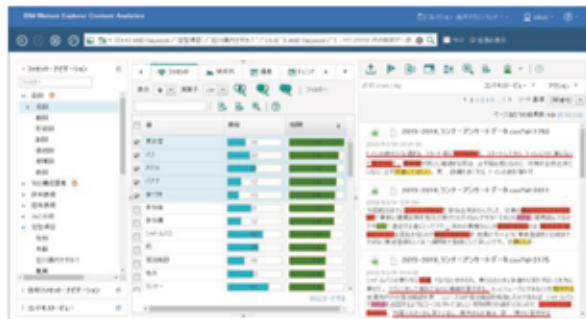
顧客の価値創造を行うと同時に、その価値を実現する仮説を立てながらデータ分析やAIモデル生成のための教師データ作成等を行う

プロジェクトテーマ



- ✓ 金沢市のビジョン「世界の交流拠点都市金沢」
- ✓ 金沢市の戦略の一貫「金沢マラソン」
- ✓ 金沢マラソンにとっての顧客「県外ランナー」
- ✓ 金沢マラソンを効果的に運営するための人材育成
運営スタッフ・ボランティア人材の強化

■分析に用いたツール：IBM Watson



構文解析された自然言語とその自然言語に関連付けられる構造化データの相関を取ることができるテキストマイニングツール

分類結果結果

updated: Sat Mar 07 2020 10:08:55 GMT+0900 (日本標準時)

クラス名	確信度
金沢駅からどうやってスタート会場まで行けばいい？	0.971610476202268
スタート会場（集合地）は？ 集合場所は？	0.9116476401017944
フィニッシュ会場に行く方法は？	0.902071748904402523
（交通機関利用）緊急の場合はどうすればいいの？	0.891120386020564622
雨天時の場合中止するかどうかいつ頃わかるのか？ どうやって応務するか？	0.881676407913982384
参加は？	0.8510441810588603041
参加料は？	0.598405868179027624
お金の確保が難しい、名前を名乗る	0.49903452027347924

自然言語に関連付けられるラベルのデータセットによって、機械学習を行いAIモデルを構築するツール

■分析結果及び金沢マラソンの改善提案

<テキストマイニングを用いた分析結果のポイント①>

上左図にある通り、県外ランナーのアンケートの中で不満と答えた方で絞りこみ、不満や要望の表現が用いられている文脈の中から「名詞」との相関を取った結果、不満の要素としては、ホテル、更衣室、バス・シャトルバス等について不満を抱えていることがわかる。しかし、これらの不満は年度との相関を取るとマラソン立ち上げ時の2015年に集中しており、翌年以降はこれらの不満が改善されていることが確認できた。一方で、金沢マラソン魅力に対し、「感謝」というキーワードとの相関が高く、かつ女性のランナーがキーワードを多用している。その他、その女性ランナーが抱える不満の要素として、タイムが遅いランナーに対するエイドサービスが行き届いていない声が上がっている。

<機械学習を用いたAIモデル生成のポイント①>

ランナーやボランティアから寄せられる質問に答えるコールセンター業務の効率化を、AIモデルを通じて支援する仕組みのプロトタイプを作成した。提供いただいたQ&Aの情報から、AIに学習させるデータを準備し、学習とチューニングを繰り返し、AIモデルを構築。上右図にある通り、ランナーからの問い合わせに対して、あらかじめ用意したQ&Aの中から適切な質問を導き出すことが出来た。

2020年の金沢マラソンに向けて



- ✓ 女性ランナーの満足度をさらに高める仕組みの構築
- ✓ AIモデル活用による業務効率化及びスタッフ・ボランティアのデータ活用スキル向上
- ✓ 市民参画によるおもてなしサービスの引き継ぎの強化

岐阜大学

産業リーダー実践の活動報告 ～外国人を呼び込む日本のTEMPURA～

工学部化学・生命工学科 3年 今野絢萌 地域科学部 3年 宮崎若菜
2年 楠本恵子、石田祥輝 2年 田口裕幸

概要

NEXCO中日本、十六銀行との連携のもと、レンタカーで高速道路を利用する外国人観光客を対象に美濃市・美濃加茂市の周辺にあるサービスエリアに人を呼び込む新たな商品を考案し、商品の実現可能な企業・事業者を発掘し、提案する。

教育的な効果・目的

岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム・産業リーダーコースの上級段階科目である「産業リーダー実践」は、岐阜県の地域産業における課題を自ら発見・把握し、課題解決に向けて、グループワークを基本に実践的に取り組むプログラムであり、地域産業の中でリーダーシップを発揮できる人材、あるいはリーダーを支援する人材の育成を目指している。

内容

1、アイデア

どの国でも人気なので国籍を絞らなくていい、中身の工夫で話題性も生まれることから「天ぷら」を採用!!

2、ねらい

岐阜県の名産品を利用することで、岐阜県の魅力の発信、SAのお土産の宣伝・売り上げの向上↑↑

3、中身の提案

岐阜県産の野菜(なす・レンコン・かぼちゃなど)や明宝ハムや鮎菓子といった岐阜県の名産品・お土産の定番商品など。

4、売り方

- ・素材をバイキング方式で選んでもらい、揚げたてを提供する。
- ・明宝ハム・鮎菓子・飛騨牛まんは本来の商品の良さも知ってもらうために「天ぷら+元の商品」のセットで販売する。



取り組みで得た学び

対象・条件を設定された上で、どうしたら人を呼び込めるか、呼び込んでかつお金をどのように消費してもらうか、0の状態からそこまで考えて商品提案をすることの難しさを感じた。

皇學館大学

「広報いせ」特集記事制作プロジェクト

文学部 3年 斎藤朋加、玉津由梨、現代日本社会学部 3年 湊裕大、森麻帆

概要

行政の取り組みを市民に広く報せる「広報誌」ですが、自分も含めて若い人にはあまり読まれていないんじゃないだろうか、という一人の学生の問いかけから始まったプロジェクトです。本プロジェクトでは、学生目線で紙媒体の広報誌のあり方を考え、特に若い人たちにどう訴求するかを考えています。

これまでに、伊勢市の「広報いせ」3号の特集記事(表紙を含む巻頭5P程度)を学生目線で企画、取材、編集しました。また、そのうちの1号では「W連携」として、大学×伊勢市×近隣7市町での連携によりほぼ同一の内容の紙面の同時掲載を行いました。学生たちは市長とともに定例記者会見に臨み、またこの取組は「月刊広報」においても2度に渡って取り上げられました。



教育的な効果・目的

平成26年度採択された本学COC「伊勢志摩定住自立圏共生学教育プログラムによる人材育成」では、連携8市町の行政職員さんを講義にお招きしながら、地域課題について学んできました。その中では先進的な取り組みだけでなく、行政であるがゆえの「悩み」なども積極的に取り上げるようにしてきました。地域課題解決のための行政の取り組みをいかに市民に伝えるか、という意味での「広報」は課題解決、そしてそれを浸透させるためにも重要だと考えています。学生たちは、いかにして「他者に伝えるか」ということを学ばせていただいています。(教育開発センター准教授池山敦)

内容

2019年4月にこのプロジェクトで初めての「広報いせ」が発行され、**伊勢市長と記者発表**をさせていただいたり、新たに1年生(次年度2年生)が沢山このプロジェクトに参加していただいたりして、素敵な経験ができました。そうして、メンバーが全員で10人になりました。そのおかげで**取材や撮影が、短期間で**より多くの場所へ行き、実施することができました。

去年の5月には、1年生の保護者の皆さんに向けたこの活動の報告を行いました。さらに昨年の12月号では**学生と県内の8市町が連携**してミーティングを行い、広報紙を発行しました。

このことが話題になり、各報道機関の方々に向けた制作発表を行いました。その同じ時期に今年の2月号の取材や撮影を同時進行で行いました。さらに6年ぶりにリニューアルされた「**伊勢市くらしの便利帳**」での一部記事を作成させていただき、そのなかでこの活動を紹介されました。

そして今年の1月には全学部の1年生が必修で受けている「伊勢志摩定住自立圏」でこの活動についてを知ってもらうべく、プレゼンを行いました。

その結果、新たに1年生(次年度2年生)が2人(3人かも知れないです)参加していただいたのでこれからの活動では、**より広い範囲での活動ができるのではない**かと思いました。

新たにこれからの活動についてのミーティングも始まり、**新体制でのこのプロジェクトがどうなるのかが大変楽しみです**。(文学部3年玉津由梨)



実施主体様の声

皆さんとても真面目に一人一人がこのプロジェクトの推進のために時間を充て、取り組んでくれています。今後も大学生を含む若者の目線を取り入れた内容を掲載することで、「**ちょっとおもしろそうやから読んでみよ**」と感じてもらい、今後継続的に読んでもらうきっかけを与えられる表紙・特集記事の制作を**一緒に取り組んでいきましょう!**

(伊勢市広報広聴課上嶋様)

取り組みで得た学び

この活動に参加していなかったら普通の学生生活ではできないような経験を沢山してきました。例えば、一眼レフの使い方やボイスレコーダーの使い方などの本格的な取材をすることができました。また、取材をする時の姿勢や話の聞き出し方も身につきました。さらには、1から記事を作っていくことの楽しさや大変さを同時に経験しました。これらの経験は社会人になっても役立つと考えています。(文学部3年斎藤朋加)



信州大学

初開催!! 「大しごと一くin信州2018」

全学横断特別教育プログラム ローカル・イノベーター養成コース 2年 村山華奈子、茂木結奈、嶋田水緒

概要

学生が「生き方・働き方」を考えるきっかけとなることを目指し、社会のリアルについて社会人と気軽に対話できる場を提案。約100もの県内企業と学生団体にご参加いただき、約500人の方が来場された。

教育的な効果・目的

学生が主体となりOJT(On the Job Training)方式で企画・運営を実践することで、目的や課題を明らかにし、事業の全体把握やタスク管理、進行台本等の作成、チームメンバーの適切な役割分担や協働のマネジメント等を身につける。

内容

1、スーツ不要「企業説明会ではないイベント!」

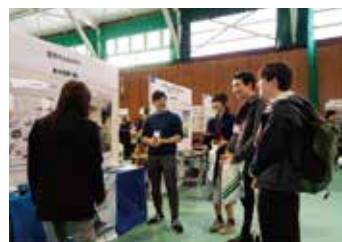
大しごと一くは入場料無料・入退場自由・スーツ着用禁止とし、学生が気軽に来られる場にするということ第一に考えた。今回は就活生だけを対象とする企業説明会とは違い、大学生や高校生など社会人と関わることの少ない学生たち全員に、どんな生き方・働き方があるのかなど、堅苦しさのある場では聞くことができない話をしてほしいという思いから、自由度の高い形にした。

2、会場設計・タイムスケジュールの工夫

体育館を会場としたが、レイアウトはイベントスペース・企業ブース・学生団体ブースの3つに分けた。タイムスケジュールはイベントを随時開催する中、企業ブース訪問時間と学生団体ブース訪問時間を交互に設定することで、どちらかが話しどちらかが聞くだけにならないように設定した。学生団体の参加は、学生の活動を社会人に知ってもらう機会としても有効だったと言える。

3、「しごと一く」の開催

イベントスペースでは、参加いただいた企業の方と学生が2対2でランダムにグループを組み、30分でさらに踏み入った話をする場を用意した。各グループには自己紹介カードやお題カードなども準備し、飽きない工夫をした。毎回参加する企業は異なるため、何度もしごと一くへ訪れた学生もいる。



取り組みで得た学び

学生実行委員会は、ローカルイノベーター養成コース1期生であり、一からイベントを企画することは全員にとって初めての経験だった。準備段階では、何が必要で現在の進行状況は遅いのか早いのかさえも分からない手探りの状態ではあったが、イベント運営の大変さや面白さに気づくことができた。学生目線で試行錯誤しながらユニークな工夫を凝らすことで、大しごと一くならではの色が出たのではないかと考える。さらに盛り上がる交流会となるよう、今回の成功点や反省点を次回の大しごと一くへと繋げていきたい。

中部大学

中部大学ESDエコマネージャーチーム ～学生主体の標準化教育～

経営情報学部 経営総合学科 3年 近松温志

概要

- 1、SDGsや超スマート社会に関連する国際標準に焦点をあてた標準化教材開発
- 2、教材を用いて14508名を対象に標準化教室を展開



教育的な効果・目的

「標準を作る・使う・教える」+地域連携を行うことで、専門知識と社会人基礎力を身につける

内容

教材開発

『リスクISO31000』

『食品安全ISO22000』

連携

『産業界』

『行政』

『中高大』

取り組みで得た学び

国際標準という難しい内容について老若男女に教えなければならなく、最初は上手いかなかったが、沢山のひとと出会い、実演していくなかで徐々にファシリテーション能力が高まっていった。消費者相手には関心を向けることから始める必要があり、集客方法から学んだ。企業や行政が相手となると専門的知識が必要になり、どのように自身のビジネスに繋げていただくかを考えながら実演をしたため、社会人としての力量の担保とともに自身の知識も深まった。また、教材開発はとても一人では出来なかったため、チームの大切さも学べた。今後、中部大学ESDエコマネージャーチームで学んだファシリテーション能力を活かし、顧客一人一人にあわせた丁寧な対応をして、地域社会に貢献していきたい。

富山県立大学

地域協働研究会COCOS



COCOS紹介動画



COCOSでは多くの新入生に入ってもらうために、日々の活動について紹介した動画を作り入学式で流しました。動画で新入生にCOCOSでの活動の楽しさが伝わるように工夫して作成しました。今年度は合計で10人もの新入生に入部してもらえました！！



謎解き脱出ゲーム



脱出ゲームを通じて参加者にもっと富山県のことを知ってもらったり、地域の人と交流を深めてもらったりするために行った企画。合計38の方が参加しました。みんな謎解きに苦戦しつつも、協力して謎を解いて楽しんでくれました！

氷見海鮮丼MAP



昨年「氷見市へもっとたくさんの人に来てほしい！」という思いから始まった企画。海鮮丼のお店をピックアップした氷見海鮮丼MAPを作り、富山県の公共施設に配布しました。この活動は北陸新聞やチューリップテレビなどのメディアに取り上げられました。



富山大学

未来の地域リーダー ～自立化に向けて～

工学部 3年 伊藤拓也 都市デザイン学部 2年 藤田学

概要

正課と正課外を通じた「未来の地域リーダー」育成について、特に今年度の夏に県内3大学の学生が参加した「とやま塾 in HIMI 2019」と、正課外の未来の地域リーダー塾がサークルとして独立した「地域デザインサークル」の活動を紹介します。

教育的な効果・目的

【未来の地域リーダー】

地域コミュニケーションマインドを持った「未来の地域リーダー」を育成するため、地域志向科目群、地域課題解決科目群、地域関連科目群の3つの科目群から4科目8単位以上を履修(単位修得)した学生に、「地域課題解決型人材育成プログラム修了証書」を授与し、「未来の地域リーダー」の称号を付与。

【未来の地域リーダー塾】

教育プログラムで醸成された地域志向を維持・成長させるため、様々な機会を活用し正課外の活動を学生に提供する。

【とやま塾】

未来の地域リーダー塾の活動の一つ。1. 地域の人々や、他学の学生と交流し、コミュニケーション力を伸ばし、2. 富山の素晴らしい自然や文化に触れることで、愛着を深め、3. 地域課題を理解し、その解決策を協働しながら模索し、地域貢献の態度を醸成するとともに課題解決力を高めることを目的としている。

【地域デザインサークル】

COC+事業終了を見据え、学生の地域活動を自主的なものとするため、未来の地域リーダー塾を発展的に解消し大学公認サークルとして活動している。

内容

とやま塾

【とやま塾 in HIMI 2019のスケジュール】

2019年9月19日(水)・1日目	
10:00	移動・昼食 北口と富山駅北口→朝陽館(水見)
13:00	開講式 水見に関する情報収集 ワークショップ「まちなかの理想ゲーム/メイキット」
19:00	夕食会 市産、学産・地産を交えた夕食会 (残り飲みたくなる留「イミダシ」)
2019年9月20日(木)・2日目	
9:00	移動 松尾館→研修先(グループごと)
午前	研修 小グループに分かれて各研修先でヒアリングと体験 ■Aグループ:TEDxTime ■Bグループ:「みらい・ビジョン」UI/UX支援センター ■Cグループ:「SAY'S/TEAM」魚問屋が始めたワイナリー ■Dグループ:「110」サードプレイス ■Eグループ:「考えるパンKOPPE」菓子問屋が始めたワイナリー ■Fグループ:水見の定置網、漁業と若い世代への継承、国産魚
午後	出講準備 研修先での学びのまとめ、情報収集、発表準備
2019年9月20日(木)・3日目	
8:30	発表準備 研修先への発表作成 (パワーポイント、発表原稿作成)
13:00	成果発表会 発表:各グループ20分×6グループ 閉講式 ■Aグループ:TEDの魅力とは ■Bグループ:学生が継続的に水見に来てくれるには？ ■Cグループ:ひそかなみりょく「水見市」 ■Dグループ:水見の新たな活躍 ■Eグループ:ヒューマン・デザイン ■Fグループ:定置網を世界で定着させるためにできること ゲスト:研修先の皆さん、市役所の皆さんなど



取り組みで得た学び

【伊藤】

スピーカーを選出するところから真剣に話し合っており、約半年という期間でしっかり準備しており、地域を盛り上げる企画をやる際に大きな気付きになりました。

【藤田】

日中に単発的に活動するのではなく、泊まりがけで活動することにより、その町の様々な顔を見ることができた。単に地域で起こる(起こっている)問題を知るだけでなく、その問題を地域の人(市民や役場職員)がどのように捉えていて、どのような対策をしているのかを知ることができた。地域の抱える問題をなんとかしようとする大人を見ることで、将来の就職を考えるきっかけとなった。必ずしもネガティブに考える人だけではないことを知った。他地域の人間の声、学生の声が、役に立つ場合もなきにしもあらずといった具合だった。変化を嫌う体勢(体質)が地方は濃いように感じた。

立山町バスツアー

【立山町バスツアー】

2018年度に新設された都市デザイン学部の学生を対象にバスツアーを催行。地域の課題や特徴を知ること、富山の理解を深めるだけでなく、それぞれ専門分野の学びにつなげました。

立山町で働く社会人の声、役場で働く役場職員の声を聞くことにより、町への理解、将来の就職に対する関心を深めることができた。



【立山町バスツアー参加アンケートから抜粋】

後半は企業がどういう人を会社にほしいかや、大学卒と院卒でとどろかかは選ばないことなどを知りましたし、4種類の全然違う企業の説明を受け自分は、将来どういう職業を選ぶのかを考えることが出来たので良かったです。

1000年前まで歴史をさかのぼって、時代が下るにつれて信仰の形も変わっていくのが面白く感じました。お話を伺った後に、実際に布橋などを見て回るのを楽しみました。より理解が深まりました。

豊富な観光資源を最大限に活かして下さらず、少しもったいない感じがしました。

名古屋学院大学

ミツバチがつなぐ人と人

～養蜂を通じた地域活性化プロジェクト～

経済学部 2年 市井龍之介

概要

大学キャンパスがある名古屋市熱田区を都市養蜂や地元商店街との連携、園児への教育イベントなどを通じて活性化するよう、学生の立場から様々な活動や提案を行っていく。

教育的な効果・目的

さまざまなイベントの企画運営を通じて、参加する学生の成功体験を大切にしながら、自己効力感の向上や社会人基礎力の育成を目指しています。

内容

1、園児に向けた教育イベント

地元の幼稚園・保育園の園児を名古屋学院大学に招待し、ミツバチに関する教育イベントを行った。寸劇やクイズを通じて、ミツバチと人との関係について学んでもらう。



2、地元商店街との連携

地元の熱田商店街と連携して、熱田神宮にて行われている市でハチミツの販売を行ったり、ミツバチを身近に感じてもらうためのステージを行うなどを行っている。また、地元の飲食店に採れたハチミツを卸しメニューに使っていただいたり、熱田の老舗和菓子店「亀屋芳広」とコラボした「カステラスク」も販売している。



3、フローハイブを活用した農福連携事業

レバーを回すだけで誰でも簡単・安全に採蜜ができるよう加工された巣箱である「フローハイブ」でミツバチの飼育を行なった。フローハイブは簡単かつ安全に採蜜ができるという特性から、障がい者福祉と農業との連携を担う活躍も期待されている。昨年の夏、このフローハイブを用いた採蜜が成功したため、名古屋にある福祉施設「名身連福祉センター」に寄贈し、福祉分野にどの程度貢献できるか経過観察中である。



取り組みで得た学び

このような活動を通じて、ミツバチと人との密接な関係はもちろん、地域における人と人との関係にも気づけた。普段生活しているだけではあまり気づけない地域の魅力や利点が見え、熱田の良さを活かすにはどうすればいいのか、について考えるきっかけになった。

この学びを後輩にも伝え、ますます熱田が発展するよう活動を続けていきたい。

日本福祉大学

東海市 カルタ制作 学びの芽 ～シビックプライドの醸成にむけて～

経済学部 3年 鈴木和也、小澤未来也 1年 加納拓磨、坂本実理

概要

「東海市かるた」の制作を企画し、「東海市大学連携まちづくり推進事業」に応募・採択され、補助金を活用してプロジェクトを運営した。愛知県東海市内の小学生をはじめ住民のシビックプライドの醸成を目的として、地域の人を巻き込んだワークショップを通して、対象年齢や制作方法などの方向性を決め、詠み句と取り札に使用する写真を募集し制作した。

教育的な効果・目的

学生が主体的に行動し、東海市への理解と制作の過程を大切にしながらワークショップや制作活動を通して、多世代の人とつながり地域とのかかわり方を学ぶことで、地域を巻き込んだ地域課題解決の力を身につける。

内容

1. 住民を巻き込んだ3度のワークショップの運営

→制作の方向性や目標決定

2. 詠み句の募集

→メンバーで考えたほか、SNSでの募集や日本福祉大学の学生の協力を頂いた。

3. 写真の募集

→メンバーで撮影したほか、SNSでの募集や東海市観光協会・東海市の写真愛好家の協力を頂いた。

4. 制作活動

3度のワークショップの他にも地域の方々や事業者、市役所職員の方など様々な方からの優れたアイデアを頂き参考にさせて頂いた。
また、個々の得意分野に応じて、役割分担を行った。

例 画像編集が得意→画像編集ソフトを用いたかるたのデータ作成
デザインが得意→詠み句や写真募集用のチラシなどの作成
細かい作業が得意→印刷物のラミネート加工
歴史に詳しい→東海市の歴史について教えて頂く



取り組みで得た学び

地域の人と協力しながら制作を行い、1つのものを作り上げる楽しさを知り、多世代の方からアイデアや意見をもらうことの大切さを学んだ。

東海市の観光地や歴史について知るきっかけにもなった。

福井大学

福井大学初「産学連携の日本酒」と「酒粕」のプロジェクト

工学部 電気電子情報工学科 学部 4年 小澤直人、工学研究科 材料開発工学専攻 博士前期課程 1年 石川優里奈

概要

福井大学COC+事業の一つである特色人材育成に関する「ふくいブランド創出分野」取り組みの一環として、地域と協働し学生がコンセプトの提案から販売まで取り組んだ「日本酒、福の愉」の誕生から今年度の活動までとSDGs達成を目指した「酒粕」プロジェクトの取り組みである。

教育的な効果・目的

福井の資源を発掘・創出すべく、地域社会の実践的な活動の取り組みにより、実践力や問題解決能力を身につける。

内容

1、日本酒「福の愉」

今年で3年目のプロジェクト

1年目(2017年度)

お酒の原料のお米を作る田植えからお酒のビンのラベル、包装(入れ箱)のデザインを製作



2年目(2018年度)

よりお酒のPRするため、ラベルのデザインの改良や、福の愉の紹介を書いたカードを制作



3年目(2019年度)

- ・お酒作りで余ってしまう酒粕を利用した商品開発の案を出し、実際に実験してみて試作品づくり
- ・試作品のPRに加えて南青山291で販売会を実施

2、「酒粕」を用いた新商品開発

- ・「消毒液」「サプリ」「カップ」の3つの試作品完成
- ・「消毒液」は、県内企業から商品化に向けて課題が提示され、検討中の段階



取り組みで得た学び

(小澤)販売会では福井大学生が田植えから携わり作ったお酒をアピールすることで、通行人やお店に訪れた人に立ち止まってお話を聞いてもらい購入していただいた。

日本酒製作のストーリーを自分の言葉でアピールすることがすごく難しく大変であったが、試行錯誤を繰り返し言い方などを変えることで販売当日用意していた在庫をすべて売り切ることができました。

(石川)発案から製品化への流れについて、県内企業さんからアドバイスをいただきましたが、主に売り出し方についてお話しいただいた内容が印象に残っています。狙う顧客層はどこなのか、分類としては医薬部外品なのか雑貨なのか、類似商品とどこで差別化をしていくかなど商品化への課題をたくさんご提示していただき、まだまだ検討すべき部分がたくさんあることを実感しました。

また、試作品も改善すべき点がたくさんあるため、今後検討を繰り返し、少しでも商品化に近づけられたらと思います。

平成30年度中部地区COC事業採択校学生交流会の様子

概要

2019年3月1日(金)に、岐阜大学及び金沢工業大学が幹事校となり、5回目の開催となる平成30年度中部地区COC事業採択校学生交流会を岐阜市内のみんなの森ぎふメディアコスモスにて開催しました。参加大学は、中部地区を中心とした近隣の大学に加え、特別参加として初回から参加する香川大学の計11大学でした(参加者約100人)。平成30年度の学生交流会でも、参加大学の学生たちは、これまでの活動(グループ活動やプロジェクト等)の成果についてプレゼンテーション及びポスターセッションを行い、他大学の発表を聞くことで互いに刺激し合う機会となりました。また、参加大学は、学生活動の成果を広く周知するとともに、学生による地域での活動や取組みの推進を図ることができました。

[参加大学](発表順)

日本福祉大学、香川大学、金沢工業大学、岐阜大学、皇学館大学、信州大学、中部大学、富山県立大学、名古屋学院大学、福井大学、三重大学(計11大学)

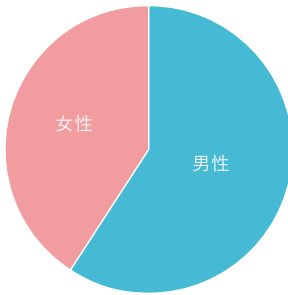
大学名(発表順)	テーマ
日本福祉大学	子どもの「自立」とは? ~児童養護施設で過ごした3日間を通して~
香川大学	瀬戸内地域活性化プロジェクト ~東かがわ市での取り組み~
金沢工業大学	~出会い、繋がり、そして未来へ~
岐阜大学	みんなで楽しい!アジカルタ大作戦
皇学館大学	TMKミライデザインプロジェクト
信州大学	話したい人がいる、知りたい人がいる、大しごと〜in信州2018
中部大学	”もったいない”をなくしたい
富山県立大学	6年目を迎えたCOC事業。COCOSの活動は,,,
名古屋学院大学	生態系の感じられるまちづくりを目指して —名古屋学院大学みつばちプロジェクトの挑戦—
福井大学	警察と連携した学生によるサイバー犯罪防止を目的とした啓発活動
三重大学	空き家を活用した移住者呼び込みプロジェクト



平成30年度 中部地区COC事業採択校「学生交流会」アンケート結果 (H31.3.1実施)

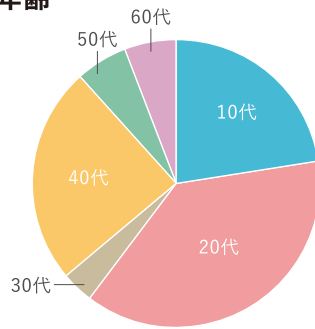
参加者数95、回答数54(回答率57%)

1. 性別



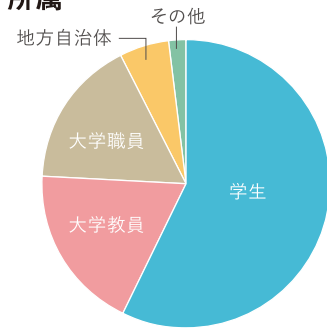
■ 男性 **32** (59.3%)
■ 女性 **22** (40.7%)

2. 年齢



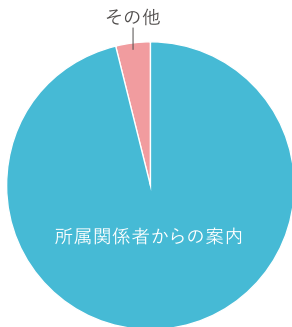
■ 10代 **12** (22.6%) ■ 40代 **13** (24.5%)
■ 20代 **20** (37.7%) ■ 50代 **3** (5.7%)
■ 30代 **2** (3.8%) ■ 60代 **3** (5.7%)

3. 所属



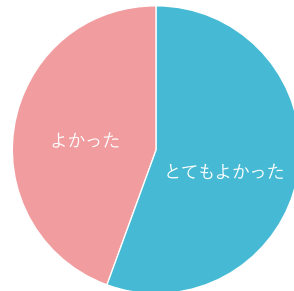
■ 学生 **31** (57.4%) ■ 地方自治体 **3** (5.6%)
■ 大学教員 **10** (18.5%) ■ 大学職員 **9** (16.7%)
■ その他 **1** (1.9%)

4. 「学生交流会」を何で知ったか



■ 所属関係者からの案内 **52** (96.3%)
■ その他 **2** (3.7%)

5. 「学生交流会」全体の感想



■ とてもよかった **30** (55.6%)
■ よかった **24** (44.4%)

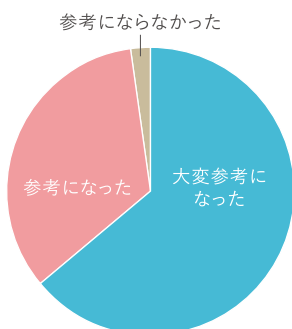
6. どの大学の発表(プレゼンテーション)が最も印象に残ったか

- ①金沢工業大学 32人(理由:スライドが見やすく、発表も聞きやすかった、デザイン、プレゼン力ともに優れていました 他)
- ②皇学館大学 6人(理由:見える化や地形模型の利用など良いアイデアだと思った 他)
- ③福井大学 4人
- 以下 日本福祉大学 3人 岐阜大学、中部大学、三重大学 2人

7. ポスターセッションではどの大学が最も印象に残ったか

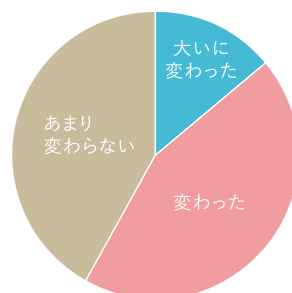
- ①名古屋学院大学 14人(理由:来た人に体験させる点で、気を引き付けられた 他)
- ②金沢工業大学 5人(理由:活動の目的や流れが明快に書かれている 他)
- 以下 皇学館大学、福井大学、いずれも5人

8. 「学生交流会」は今後のあなたの取り組み(研究、地域活動、業務など)の参考になったか



■ 大変参考になった **32** (64%)
■ 参考になった **17** (34%)
■ 参考にならなかった **1** (2%)

9. 「学生交流会」の参加前と比べて、地域に対する意識や地域活動への意欲は変わったか(学生のみ回答)



■ 大いに変わった **5** (13.9%)
■ 変わった **16** (44.4%)
■ あまり変わらない **15** (41.7%)

○具体的にどのような意識や意欲の変化があったか(自由記述)

①意欲の高まりに関する記述

- ・さまざまな方に評価していただき非常に自信になった。
- ・情報発信など広報に力を入れていこうと思った。
- ・地域のかかわり方には多くのプロセスがあり、多面的な見方が必要であると感じた。
- ・学生に主体的に関わらせることが重要だと改めて感じた。
- ・前回のイベントで、自分たちなりに成功したと思っていましたが、様々な方向性からそれぞれの専門性をフル活用されていて、まだまだ高みを目指して活動しようと思った。
- ・他県の様々な視点、意見を学べたことは大変勉強になった!
- ・今後の活動の意義や目的を気にしようと思った。
- ・もっと広いコネクションを用いて柔軟な活動ができると思えた。新しいアイデアをもらえた。
- ・地域や大学によって様々な活動を行っており、自分のなかで新しい発見があり、もっと地域活動に目を向けようという気持ちになった。
- ・他の大学も様々な取り組みをしていることを知ることで、自分ももっとたくさんの経験を積みたいと感じました。

②活動の参考になった等の記述

- ・様々な形での地域の関わり方、貢献の仕方があることが分かりました。これからの地域活動にも何か生かせるものはないか考えさせられました。
- ・自分たちの組織の仕組み、及び実際に地域社会にどのように貢献できているか見直すことができた。
- ・他大学の取り組みを参考にすることで、今までにない考えを持てた。
- ・地域活性化というものにも様々な形があり、アクションの仕方があるのだと気付かされた。
- ・いかに地域と協働できるかの参考になった。
- ・様々な活動をしている方がいて勉強になった。
- ・自分たちにはない視点で地域活動されている方が多く、刺激を受けた、かつ今後の活動の参考になった。
- ・文系ではないのですが、理系ならではの視点からまちづくり等に取り組む活動について知れた。
- ・まちづくりの考え方における幅を広げられた。
- ・学生たちの活発な地域活動が各地、各大学で行われていることを知った。
- ・自分のひとつに凝り固まった考えだけでなく、色々な活動を見ることで自分のなかで変化をおこして、さらなる考えにたどりつけた。
- ・地域住民をまきこんで行動していくことの大切さを強く感じた。

③その他、意見等

- ・COCは意見交換を様々な方と行うことで、より良いものになっていくと思います。私たち学生にとって、とても勉強になりましたし、刺激になりました。
- ・学生さんの活動で、改めて考えて行かなくてはいけない事柄があり、大変参考になりました。
- ・大学生ならではの専門性の高い取り組みの方が結果として残る。説得力がある。地域課題の解決が難しいという結果があっても良いのではないかと。継続的な取り組みを前提に取り組み内容の差は授業のカリキュラムの差なのか、地域との連携度合いの差なのか…
- ・商品開発等を行っている大学のやり方を学び、いずれは自分たちでも行えるようになりたい。
- ・継続しての開催を希望します。
- ・様々な大学の学生の地域活動を知れてとても参考になった。
- ・自らが問題意識をもって取り組んでいるプロジェクトは実働の成果が明確であり、継続的な事業として成立していけるものであると思った。また、学生(活動を担った)自身が活動から何を心得、自身がそれをどう生かしていくのかの意識をしっかりと確認することが最も重要であると思う。
- ・様々な視点からの活動を知ることができて、考えさせられた。
- ・ありがとうございました。今後も期待しております。よろしくお願いいたします。
- ・長野大学では「まちなかキャンパスうえだ」を運営しています。若者とのつながり、キャンパスのつながりをもって「まち」を活性化したいと考えており、出来れば全国まちキャンサミットを実施したいと考えていますが参同団体はいませんか!
- ・活動、発表に対して、アドバイス等をしていただける機会が欲しいです。
- ・ポスターセッションやプレゼン後の他大学との交流時間ももっとあってほしい。話し足りなかった。
- ・地域の枠を超えて様々な学生の取り組みをすることができ有意義な時間となりました。ありがとうございました。地域の企業や行政の方の参加がもっと見られると面白くなるのではと感じました。
- ・もう少し楽しい雰囲気であれば良かったらと思った。審査会が重苦しくしていたのでは。ポスターセッションでは元気よかったです。
- ・互いに刺激を受けあって高めあえるとても良い機会だと改めて感じました。企画運営ありがとうございました。

平成30年度はばたけ地域創生士!サミットの概要

平成30年11月13日、14日に全国でCOC+事業を展開している学生、教職員らが一堂に会した「はばたけ地域創生士!サミット」を、ふくいCOC+事業推進会議と、ぎふCOC+コンソーシアムの共催、幹事大学の福井大学と岐阜大学により福井県県民ホールで開催されました。県内外の30大学・行政機関・企業を含む52団体、約200人が参加しました。

プログラム

開会挨拶

福井大学長 眞弓光文氏

来賓挨拶

文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長 中野理美氏
福井県 総務部長 櫻本宏氏

はじめに

「はばたけ地域創生士!サミット開催に向けて」
福井大学 理事・副学長 岩井善郎氏

基調講演

なぜ『地域創生』か?
～来る社会と、大学教育で身につけるべき力から考える～
福岡女子大学 国際理学部 准教授 和栗百恵氏

事例発表

秋田COC+ 「あきた創生推進士」
岐阜COC+ 「ぎふ次世代地域リーダー」
佐賀COC+ 「子ども発達支援士」
富山COC+ 「未来の地域リーダー」
福井COC+ 「ふくい地域創生士」

鼎談・クロストーク

「未来に向けたCOC+」

まとめ

福井大学 理事・副学長 中田隆二氏

ワークショップ

地域創生を志す私たちの「ことば」

～人と出逢い生まれた「ことば」・この先変わりゆく「ことば」～

閉会挨拶

岐阜大学 理事・副学長 野々村修一氏



国立大学法人 岐阜大学

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)
ぎふ清流の国、地×知の拠点創成:地域にとけこむ大学
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」(COC+事業)
岐阜でステップ×岐阜にプラス 地域志向産業リーダーの協働育成

令和元年度

中部地区COC事業採択校学生交流会 ・称号サミット

編集・発行 地域協学センター
〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL .058-293-3880
FAX.058-293-3881
<http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

発行 令和2年3月

装丁・印刷 canpai design



国立大学法人

岐阜大学



文部科学省

地(知)の拠点

国立大学法人 岐阜大学

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 TEL.058-230-1111(代表)

岐阜大学 サテライトキャンパス

〒500-8844 岐阜市吉野町6-31 岐阜スカイウイング37 東棟4F TEL.058-212-0390(代表)

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community

[E-Mail] ccsc@gifu-u.ac.jp [URL] <http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

TEL.058-293-3880 FAX.058-293-3881

発行：令和2年3月